新部局長の抱負

級長はクラスの小使いなり

工学部長　佐々木　和　夫

奇妙な見出しを見て，直ちにサトー・ハチローの“全権先生”を想い出された方もおいでだろうと思います。そんな方がいて下されば，筆者の意図の過半は達したようなものです。小使いという言葉には支障もあると思いますが，全権先生を引用する以上避けられませんので使わせていただきます。

全権先生を読んだ方は御存知のとおり，小学生の悪童が，同級生の級長を評して黒板に落書した警句が，この小文の標題なのです。実は標題のように書こうとしたのだけれど，字を間違えて“級長はクラスの小便なり”と書いてしまったところが話の味噌なのですが。

閑話休題。なぜこんな書き出しをしたかと申せば，“学部長は学部の小使いなり”と常日頃から私は思っているからなのです。常日頃からですから，ナニも今回の選挙結果とは関係ありません。誰方が学部長であろうと，構成員である私から見ればこま使いに過ぎません。もちろん，たまたま私がその立場に立たされたわけですから，工学部の使い走り役をもって自任しております。使い走りでありますから，抱負，経倫などは持ち合わせておりません。と言ってしまっては身もふたもありませんが，それが真実であります。

あえて申せば，構成員の意志の赴くところを見届けて，その意志達成のための走り使いに徹したいと思っている次第です。きれい事を言って逃げているつもりはありません。格別の抱負など持ちようがないではありませんか。

工学部は大きな世帯ですから，2年任期の学部長の個人的な意志や思いつきで動くものでも動かせるものでもありません。組織としての大きな意志に基づいて計画的かつ継続的な運営が必要とされるものと思っています。その意志が果して構成員諸氏の理解するところとなっているかと申しますと，現状にはいささか疑問な点も感じられますので，そのあたりの確認が使い走り役の最初で最大の仕事になるのではないでしょうか。幸いにして，我が工学部には気鋭にして有能な方々が多数おられますし，開放的な雰囲気は学内でも随一であろうかと思われます。このような長所をいつまでも受け継いで行くことが，工学部の活力を維持増進する上に必須でありましょう。

以上が広報委員会の要望に対する返辞ですが，紙巾に余裕がありますので，脱線した雑談にいたします。モノワカリの良さが主題です。あの人は物わかりが良いとか言うときのあれです。物わかりの良い人は，他人に好かれますが，事を仕遂げるにあたってあまり有能ではない。反面，物わかりの悪い人は，対人関係を荒立てたり，集団の中ではトカクじゃま者にされやすいけれど，大きな事をなしとげるには適しているのではないでしょうか。同一のパラダイムに属する集団の中では，各人すべてが物わかり良くなくてはいけませんが，パラダイムを異にする集団との間では物わかりが良すぎては困るのではないかと思います。1月10日現在，サダム・フセインとブッシュの論理は嚙み合っていないようですが，あれがパラダイムを異にする集団同志の本来の姿であるように思えます。いつも物わかりが悪いというのは困りますが，相手に応じ時によっては物わかりが悪いことも必要なのではないでしょうか。